今　月　の　一　冊

元木更津市教育委員会教育長　西村　堯　選

教えから学びへ
ー教育にとって一番大切なことー

汐見　稔幸　著　・　河出新書
ISBN978-4-309-63136-3
890 円 ＋ 税

明けましておめでとうございます。本年も「今月の一冊」欄をご愛読ください。

年頭に相応しい深みのある一書を紹介しよう。ページを追うごとに、考えさせられる一書である。著者の問題意識は、まず、p.19 に次のように書かれている。

> *これまで私たちは「なぜ人は学ぶのか」という根本的な問いについてしっかりと挑んできませんでした。効率のよい「教え方」や「学び方」という手段についてはあれこれ研究されてきましたが、なぜそれを学ぶのかという最も大事な問いについてはとばしてきてしまった印象があります。*
>
> *(p.19)*

そして、著者は、

> *人間が深いところで求めているのは、「生きているっていいな」という感覚です。それが幸せであり喜びだと私は考えています。*
>
> *(p.22)*

と述べる。

ここに著者の考えの根本があるように思う。さらに続けて、

> 「生きているっていいな」と心から思えるようになるために、人間には二つのことが必要です。「自分の自己実現」と「社会の自己実現」です。
>
> (p.23)

> 人間は、自分だけが幸せになるのではなく、みんなで上手に支え合って、みんなが生き生きとして幸せになっていけるような社会を目指す努力をしない限り、結局、自分も幸せになれないのです。
>
> (p.24)

と述べる。

「なぜ人は学ぶのか？何のために学ぶのか？」という問いに対する著者としての答えは、以上のように私は受けとめた。(なお、p.26 にも、さらに要約した著述がある。)そして、

> 発想はグローバルに世界規模で考え、でも行動はローカルに　＜中略＞グローカルという言葉も生まれてきました。
>
> (p.76)

と提言する。

今、教育界では、GIGA スクール構想をはじめ、大きな変革が怒濤の如く押し寄せてきている。とかく新しいことに目を奪われて教育の根本のところを忘れていないか。本書の前半部分は、ここのところに警鐘を鳴らす。

第 3 章から「学び」と「教養」についての基本的な考え方が述べられる。「学び」とは何か。著者は、次のように述べる。

「学び」とは、脳の中に情報処理の回路が新しくできること

(p.86)

…　さらに別の言い方で置き換えるならば、大きく次の二つのことが言えます。一つは「新しいことを知る」。
＜中略＞　そしてもう一つ、「新しいスキルを身につける」。

(p.86 ～ 87)

「新しいことを知る」、つまり「わかる」とは、次の三つのレベルに分けられる、という。

1　言葉・名前を知る
2　対象の属性を知る
3　現象の背景にある法則を知る

(p.87)

以下、この三つについて詳しい解説が述べられる。私が改めてハッとさせられたのは、1 の「言葉・名前を知る」の箇所である。「言葉・名前を知る」などは当たり前のことのように考えていたが、深い意味があった。

存在している世界に区切りを入れ、分節し、それぞれに命名してはじめて、私たちはその対象を認識できるようになります。

(p.88)

と述べられて、事の重大さに気づいた次第である。(私の不勉強！)

このように、私だけかも知れないが、これまで見過ごしてきた事柄について、根本に立ち返って鋭く論述される。それが随所に出てくる。

例えば「語義」と「意味」の違いについて。

・meaning　　＝ 社会が与えた意味を理解し、そういうものだとして取り入れていくこと。「語義」

・sense　　＝ それぞれ自分の経験から価値づけしているのが「意味」

> *人間は「語義」を学ぶことで社会性を身につけます。しかし、社会のなかで皆が使う「語義」に、その人なりの「意味」が乗ることで、その人の個性が出てくるわけです。*
>
> *(p.157)*

というわけである。

あるいは、MIT(マサチューセッツ工科大学)では、いますぐに役立つような知識はほとんど教えない。理系の大学でありながら文系のことをとても重視していて、特に音楽も重視している、とのこと。

> *西洋音楽理論は数学理論と響き合うところがあります*
>
> *(p.203)*

という指摘には驚いた。大変興味深い。

まだまだ興味深い所、(私にとっては)未知の事柄がたくさんでてくる。

新書版 250 ページ程の書物であるが、さりげなく書かれた言葉に新しい発見・気づきがある。語り口は柔らかいが、なかなか深い本である。激動の時代だからこそ、ぜひ手に取って今一度、根本のところを考えてみたい、そういう書物である。

今月の一冊　(令和 4 年 1 月号　第 175 号)